

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：33708

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04155

研究課題名(和文)臨床場面における怒り反すうの研究

研究課題名(英文)The study of anger rumination in clinical perspective

研究代表者

八田 武俊(Hatta, Taketoshi)

岐阜医療科学大学・保健科学部・准教授

研究者番号：80440585

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、若年者と高齢者について、怒り反すう特性とほかの精神疾患に関する症状との関連について調べた。その結果、若年者において、怒り反すう特性が高い人ほど強迫性尺度や不安尺度、抑うつ尺度、PTSDに関する尺度得点が高かった。このことは、怒り反すう特性が様々な精神疾患の症状に含まれることを示唆している。さらに、若年者において、怒り反すう特性が高い人ほど認知機能検査における散文記憶課題とストロープ課題の成績が低かった。この結果から、怒り反すう特性は記憶や抑制機能の低さと関連することが示唆された。一方で、高齢者において、若年者で見られたような関連はみられなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果は、怒り反すうがほかの精神疾患とも関連があることを示しており、臨床場面における怒りの経験や表出の理解に役立つ可能性を示唆している点で社会的な意義があると考えられる。また、怒り反すうと抑制機能との関連に関する結果は、怒り反すうを思考抑制に関する制御過程の失敗とする先行研究の結果を支持するものであり、学術的に有意義であった。

研究成果の概要(英文)：In this study, the relationship between anger rumination trait and symptoms of other mental diseases for young and elder people was examined. The results indicated that anger rumination trait positively correlated to Japanese version scales of MOCI, SAS, CES-D, and IES-R in the young people group, but these relations were not the case in the elder people group. These suggest the possibility that anger rumination might be one of symptoms in some mental diseases. In this study, it was also examined the relationship between anger rumination and cognitive function. As the result, in the young people group, the higher score of anger rumination scale was, the lower scores of memory and Stroop tests were, however, it was not the case in the elder people group. These results suggest that the anger rumination trait relates to the deficits of memory and inhibition functions.

研究分野：心理学

キーワード：怒り反すう

## 1. 研究開始当初の背景

国内では怒り反すうについて、そのメカニズムや、対人関係や行動、さまざまな精神疾患などとの関連はほとんど検討されていない。実際、怒り反すうの性差や発達的变化、神経心理学的なメカニズム、さらには攻撃行動や心身の疾患などとの関連について専門分野の雑誌に発表された研究はごくわずかである。我が国における怒り反すうに関する科学的資料が不足しており、臨床場面を中心に多面的な検討を行う必要があるといえる。とくに、最近の国内の研究では、反すう自体の抑制や継続する怒りの鎮静化として気晴らしやマインドフルネス(瞑想法)といった対処法の効果に関する検討(例えば銅島・田中, 2013; 平野・湯川, 2013)が目立つが、気晴らしの効果について一貫した結果は得られておらず、マインドフルネスも部分的な効果しか示されていない。これらの方法を臨床場面において実効性の高い技法として機能させるためには、怒りを対象とした反すうやその効果に関するメカニズムや、他の精神疾患との共通性などに関する基礎的資料が必要であると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、注意制御の不調という観点で共通すると考え、怒り反すう特性と精神疾患において認められる症状との関連を明らかにすることであった。こうした知見は、多くの疾患に共通する認知や行動を見出したり、逆に個々の疾患の特徴を把握したりするのに役立つことから、臨床場面においても有益であると考えた。たとえば、認知行動療法であれば、治療の対象とすべき中核的な認知や行動を明らかにできるかもしれない。

非意図的で再帰的な思考である反すうは思考抑制に関する制御過程の失敗と関連があり、ワーキング・メモリーなどの注意や抑制を司る認知機能とも関連することが指摘されていることから(Whitmer & Gotlib, 2013)、本研究の第二の目的は、怒り反すうと認知機能との関連について調べることであった。

さらに、怒り反すうは自らが意図せずとも怒り体験に注意が向けられるという点から、認知機能のうちとくに注意機能との関わりが強いと想定される。申請者は怒り反すうが入眠不調と関連することを示しているが、その原因として、多くのひとが就寝の際に部屋を暗くしたり、外界からの刺激量を減らしたりするため、注意を自己の内面に向けやすくなることを挙げている。そこで、申請者は注意機能を中心に怒り反すうを促したり抑制したりする外的要因についても検討する。具体的には、怒り反すうが生じやすい状況要因や心拍変動バイオフィードバックが怒り反すうに及ぼす影響について検討する。

## 3. 研究の方法

研究対象は4年生大学の大学生である若年者と北海道八雲町の住民健診に参加した40歳以上の中高年者であった。本研究では、健常者な若年者を対象に怒り反すうと強迫性障害、不安障害、抑うつ、PTSDに関する症状、および怒りを反すうしやすい状況について測定した。怒り反すうは怒り熟考、怒り体験想起、報復思考の3つの下位尺度からなり、その個人特性を測定する日本語版怒り反すう尺度(ARS)、強迫性の測定にはMaudsley Obsessional Compulsive Inventoryの邦訳版(MOCI)、不安には自己評価不安尺度(SAS)、抑うつ症状にはCES-Dうつ病自己評価尺度(CES-D)、PTSD症状には改訂版出来事インパクト尺度(IES-R)、自己愛傾向には自己愛人格目録短縮版(NPI-S)を用いた。ただし、対象者の負担軽減の観点から全対象者に全ての項目を測定できなかったため、尺度によって対象者数が異なる。同様の理由から、中高年者についても測定項目は毎年1つの尺度に限られたため、尺度によって対象者数は異なり、IES-Rに関する測定は行っていない。

怒り反すうと高次脳機能との関連を調べるため、若年者について質問紙を実施した後、実験参加に関するアンケートを行い、承諾が得られた者を対象とした。中高年者については、住民健診における検査値を用いた。なお、複数年参加している場合、最新の値を用いた。高次脳機能検査には認知症診断自体が目的ではなく、予防的観点から健常成人を対象に行うスクリーニングを目的とし、前頭葉機能を構成する注意、言語、記憶、空間機能、実行系機能に関する検査項目からなる神経心理学検査バッテリー(NU-CAB)を用いた。

バイオフィードバックによって、怒り反すうによる怒りの増幅を防ぐことを調べるための実験では、高次脳機能検査の実験参加者に依頼し、承諾が得られた若年者のみを対象とした。参加者は、3日間、怒り体験について思い出した際にエムウェーブを実施することと、就寝前に思い出した怒り体験の内容と、当時と現在の怒りの強さなどに就いて評定する質問紙に回答するよう求められた。なお、実験では、心拍情報のフィードバックにエムウェーブを用いた。

## 4. 研究成果

ARSと他の疾患症状を測定する尺度間の関連について、結果は表1と2のようになった。若年者における結果は、怒り反すう特性の得点が神経症や不安障害、抑うつ、PTSDを測定する尺度と有意な正の相関関係にあることを示していた。しかし、年齢を調整変数とした高齢者に関する

相関分析では、怒り反すうと抑うつとの関連のみが有意傾向であった。

表1 若年者における尺度得点間の相関係数

	MOCI	SAS	CES-D	NPI-S	IES-R
ARS	.46**	.42**	.53**	.05	.67**
怒り熟考	.41**	.34**	.48**	.03	.58**
体験想起	.42**	.41**	.49**	.05	.67**
報復思考	.38**	.36**	.43**	.05	.54**
N	480	608	705	1077	255

表2 中高年者における尺度得点間の相関係数

	MOCI	SAS	CES-D	NPI-S
ARS	.17	.14*	.21**	-.02
怒り熟考	.21*	0.12	.20*	-.06
体験想起	.16	.15*	.21**	-.07
報復思考	.07	.09	.18**	.13
N	120	217	181	93

つぎに、ARSと高次脳機能の関連について、結果は表3と4のようになった。若年者における結果は、怒り反すう特性が記憶や抑制機能の低さと関わりがあることを示唆している。なお、高齢者においては、年齢を調整変数とした相関分析の結果、有意な相関関係は示されなかった。

表3 若年者におけるARSと認知機能検査得点との相関係数

	D-CAT1		D-CAT2	
	散文記憶	ストループ	作業量	見落し率
ARS	-.17*	.21**	-.09	-.01
怒り熟考	-.14	.15	-.09	-.06
体験想起	-.18*	.17*	-.05	-.03
報復思考	-.14	.30**	-.10	.11
N	149	149	149	149

表4 中高年者におけるARSと認知機能検査得点との相関係数

	D-CAT1		D-CAT2	
	散文記憶	ストループ	作業量	見落し率
ARS	-.01	.05	-.08	-.02
怒り熟考	.04	.01	-.04	-.07
体験想起	.00	.03	-.04	-.04
報復思考	-.12	.12	-.18	.09
N	227	227	227	227

若年者の怒り反すうが生じやすい状況について調べるため、怒り反すう得点の中央値によって怒り反すう高群と低群を設け、各状況における比較を行ったところ、図1に示す結果となった。あらゆる状況において怒りを反すうしやすい人はそうでない人よりも怒りを反すうしやすいことが示された。つぎに、携帯・スマホ利用とテレビ視聴を除き、一人でいる状況とそうでない状況ごとに平均点を算出し、怒り反すう特性要因と状況要因を独立変数、怒りの反すう体験を従属変数とする分散分析を行った結果、一人でいる状況は怒り反すうを促すことが示された( $F(1, 252) = 113.84, p < .01; M = 2.70$  vs.  $2.04$ )。中高年者についても同様の手順で検討したところ、一人で部屋にいるときと入浴中を除き、怒りを反すうしやすい人はそうでない人よりも怒りを反すうしやすいことが示された。しかし、分散分析の結果、怒り反すう特性要因と状況要因の交互作用は有意でなかった。

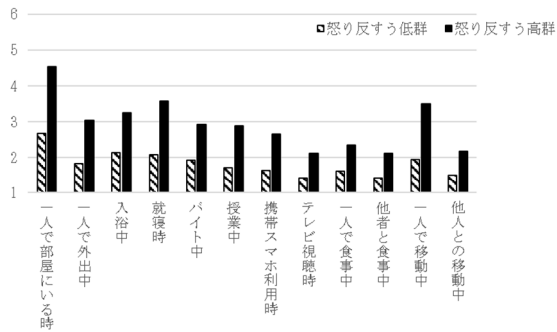


図1 若年者における状況と怒り反すう特性による怒り反すう体験

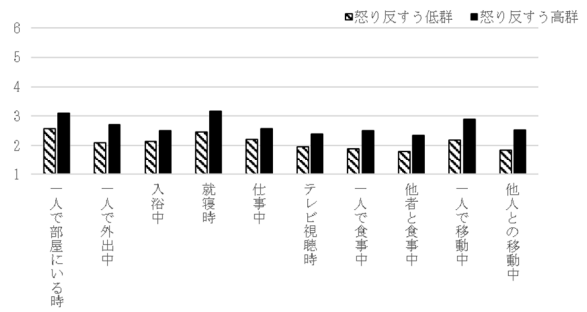


図2 中高年者における状況と怒り反すう特性による怒り反すう体験

最後に、怒り反すうを緩和させる方法として心拍変動バイオフィードバックがもたらす影響の検討するために3日間にわたる実験を行ったが、回答漏れや、エムウェーブを実施していないなどの理由で、実施研究全体を通して、科学的な妥当性を満たすのに十分なデータを得ることができなかった。そこで、一部のデータを示す。エムウェーブを実施した対象者について、怒り反すう低群と高群からなる被験者間要因を怒り反すう要因、怒り体験直後と就寝前の怒りの強さからなる被験者内要因を時間要因とし、3日間それぞれについて分散分析を行ったが、3日間のいずれにおいても怒り反すう特性要因の効果は示されなかった。

	初日		2日目		3日目			
	体験直後	就寝前	体験直後	就寝前	体験直後	就寝前		
低群 (N=7)	10.29	7.86	低群 (N=7)	18.57	11.43	低群 (N=8)	15	5
高群 (N=8)	10.63	4.38	高群 (N=7)	29.29	17.86	高群 (N=7)	22.86	12.86

ただし、エムウェーブを実施した怒り反すう高群を対象に、体験直後と就寝前の怒りの強さを比較したところ、3日目においてのみ、有意な傾向が見られた( $t(6) = 2.22, p = 0.068$ )。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 八田武俊・八田純子・田村達・及川祐一	4. 巻 12
2. 論文標題 怒り反す特性と自己愛傾向との関連	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岐阜医療科学大学紀要	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八田武俊, 八田純子, 田村達、及川祐一	4. 巻 14
2. 論文標題 怒り反す特性とトラウマティック・ストレスとの関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岐阜医療科学大学紀要	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 八田武俊・八田純子・田村達
2. 発表標題 怒り反す特性と自己愛傾向との関連
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 八田武俊, 八田純子, 田村達
2. 発表標題 怒りを反すうしやすい状況要因の検討
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	八田 純子  (Hatta Junko)  (40454318)	愛知学院大学・心身科学部・准教授   (33902)	
研究分担者	田村 達  (Tamura Toru)  (10515109)	岩手県立大学・社会福祉学部・准教授   (21201)	
研究分担者	及川 祐一  (Oikawa Yuichi)  (10722481)	福島県立医科大学・公私立大学の部局等・助手   (21601)	